

神明山古墳の新研究

奥村清一郎

1. はじめに

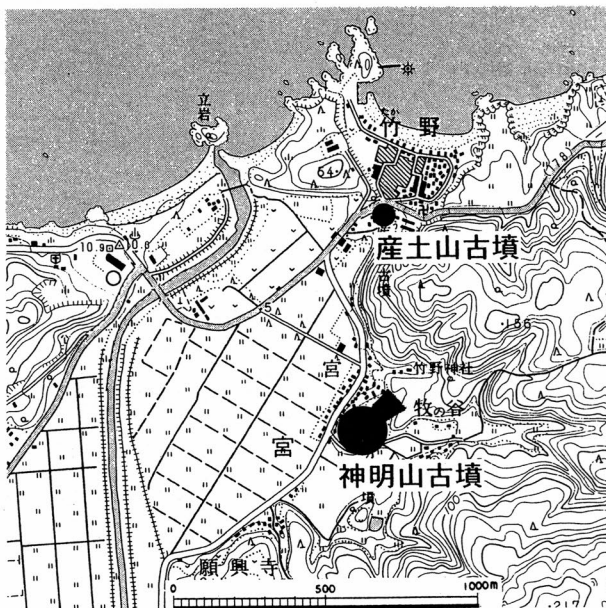
私は、本誌第2集において神明山古墳を取り上げ、その墳丘の本来の形状・規模を推定復元した上で、その設計図が鳥取県北山1号墳、黒部銚子山古墳上段墳丘へと受け継がれて行った可能性を指摘した。^(注1)

今回は、再び神明山古墳に取り組み、その墳丘のモデルプランがどこから導入されたかという問題、およびそこから派生するいくつかの論点について、私なりの結論を出してみたいと思う。

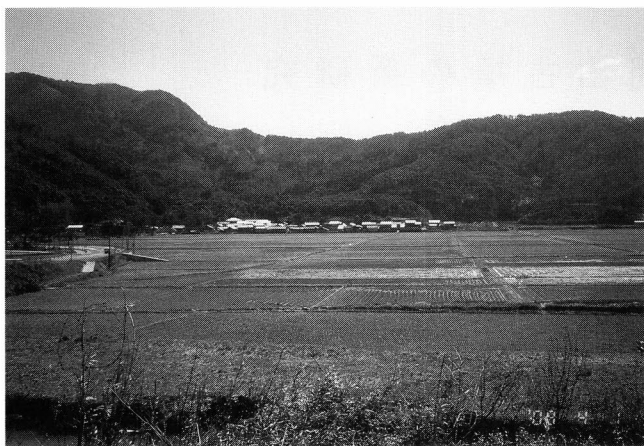
上記の研究を進めるにあたり、現地地形から可能な限りの情報を引き出す必要性が生じたため、平成11年の秋と平成12年の春の2回計3日間を現地踏査にあてた。第1回目の踏査は、小春日和の平成11年11月21日に実施し、古墳周辺の地形観察ならびに後円部墳丘の微地形の観察を行い、記録を作成した。第2回目の踏査は、雪解けを待って平成12年3月31日と翌4月1日に実施し、主に前方部の微地形の観察と記録作成、写真撮影等の作業を行った。観察結果の記録にあたっては、同志社大学考古学研究会によって作成された測量図を活用させていただいた。^(注2)

2. 古墳外周部の遺構

神明山古墳は、いわゆる丘尾切断工法を採用して築造された巨大前方後円墳である。前方部を尾根続きの北東側に、後円部を丘陵端部の南西側に置き、前



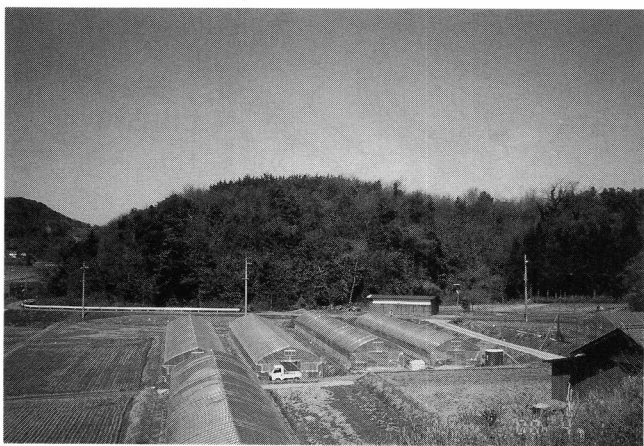
第1図 神明山古墳の位置



第2図 北西からみた神明山古墳



第3図 神明山古墳近景

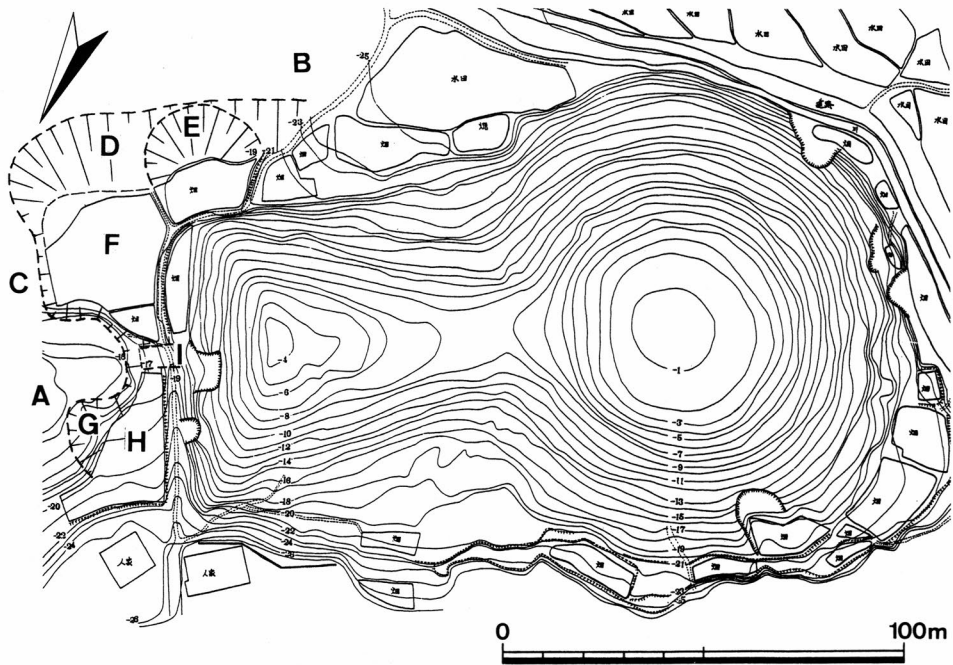


第4図 南からみた神明山古墳(右手前は尾根地形B)

方部前端部で自然丘陵と古墳とを切り離す、丘尾切断工事が施工されているのが特徴である。その具体的な工事の跡を現地で観察し、測量図に記入したのが第5図である。

古墳は、竹野川の河口部にできた潟湖を北方眼下に見下ろす、北東から南西方向に派生する丘陵支脈Aの端部を占めて営まれている。この尾根地形Aの南側には、並行して走る尾根地形Bが存在する。尾根地形Aと尾根地形Bとの間には窪地が存在するが、自然の谷状地形、すなわち古墳築造以前の旧状をとどめているのは、C点より北東側に限られ、C点以南は、古墳時代以降の改変が加えられている。

切り通し状地形Dは、尾根地形Bの側面をすり鉢状あるいは屏風状に大きく削りこんで形成された地形で、高低差10m以上の急斜面が続く。上端線・下端線ともに前方部の墳丘斜面の対岸を形成するように、「L」字状の外形線を形成している。この切り通し状地形Dは、前



第5図 神明山古墳周辺の遺構

方後円形の周濠を意識した前方部右隅付近の空壕を形成するとともに、墳丘に必要な大量の土石を確保した、土取り場跡兼周濠外壁の遺構と考えられる。切り通し状遺構Eは、切り通し状遺構Dの中に見られる、ひときわ急傾斜をなす、すり鉢状の地形である。後世の崩落の跡かもしれないが、前方部右隅部の対岸に位置しており、前方部右隅部の外周部に空壕を確保するために掘削された、古墳時代までさかのぼる土取り工事の跡である可能性も否定できない。

平坦地Fは、もとの谷水田または畑で、現状では杉林となっている、周囲より一段低い平坦地である。前方部右隅部から前方部前面部にかけての範囲にほぼ完成した空壕の跡と見られる。この平坦地Fから南西方向に階段状にレベルを下げながら連なる通路状の段々畑も、空壕の跡と見られる。平面形は前方後円形を指向したものと思われるが、くびれ部の側面付近で尾根地形Bが終息するためか、やや不整形なものとなっている。

切り通し状地形Gは、切り通し状地形Dに対応する形で中軸線の左側に施工された土取り工事の跡と見られる。斜面地Hは、切り通し状地形Gの下面に展開する緩斜面である。平坦地Fと対応する、前方部前面に設けられた空壕状地形である。

切り通し状地形Dと切り通し状地形Gは、北端の位置をほぼそろえており、前方部前面の空壕の規模が、幅約35m前後に設計されていたことをしめすものと思われる。ただし、切り通し状地形Dと切り通し状地形Gとを結ぶ上端線は一直線とはならず、「コ」の字状に南に

張り出している。この張り出し部は、従来の一般的な見解では、丘尾切断工事を省略したために残った尾根地形の先端部とみられてきた。ところが今回、図のように地形分類し、人為的な土木工事の跡を追いかけてみると、この「コ」の字形の崖線の張り出し部とその中央部の一段低くなった部分に見られる通路状地形Ⅰとは、いずれも古墳の中軸線を意識した位置に計画的に掘り残されたものである可能性が高いことが判明した。その性格については、幅と高さを減少させながら、前方部の中央に接続する、渡り土堤・陸橋部の遺構である可能性を指摘しておきたいと思う。

3. 墳丘の現況調査報告

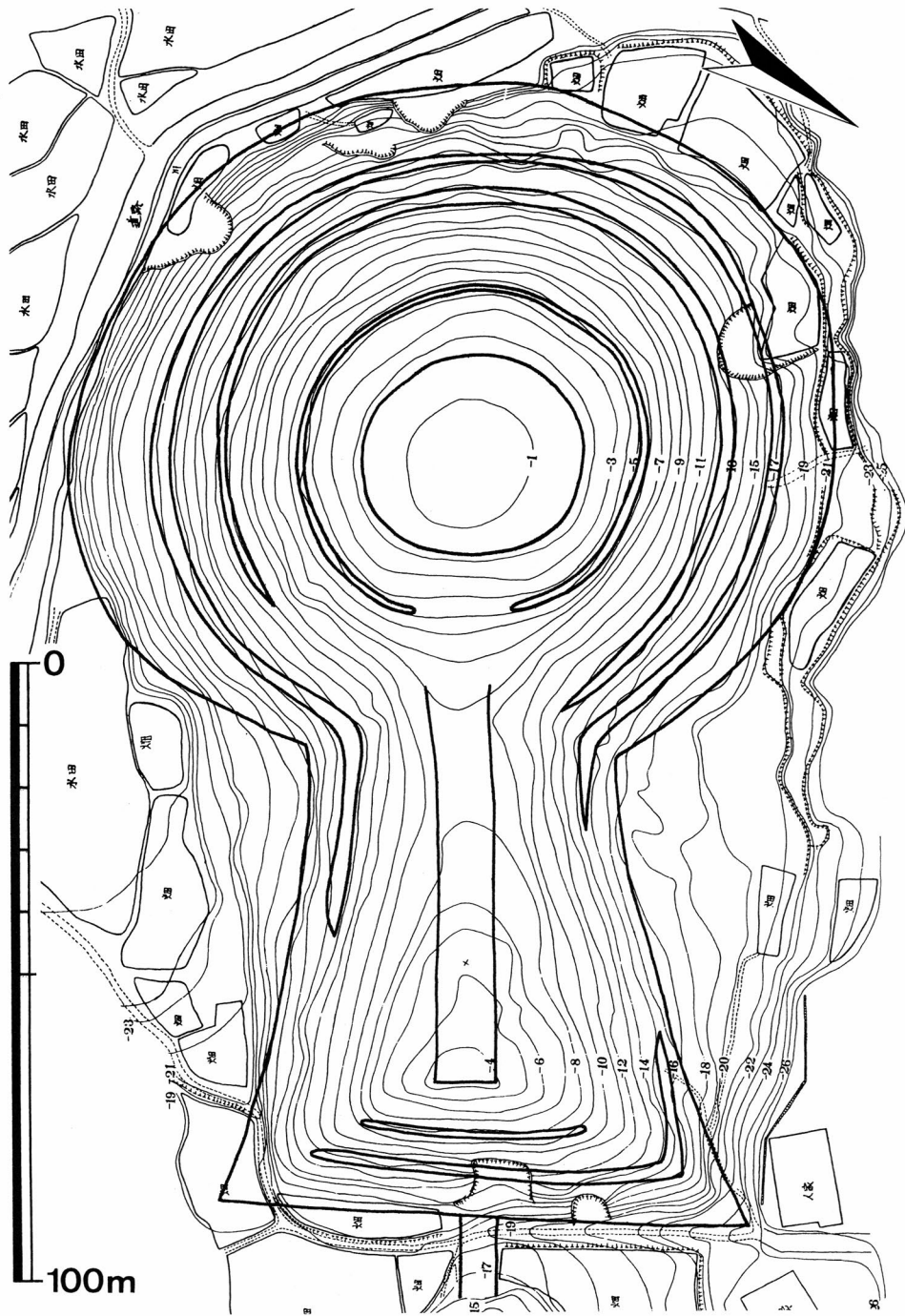
神明山古墳の墳丘部を、くまなく踏査し、とくに平坦面と斜面との配置状況に着目して、その両者の境目、つまり傾斜変換線を加筆したのが第6図である。墳丘の表面は、土取りや崩落による欠損部がとくに裾部付近の各所で見受けられるが、墳丘の規模が大きいため、全体としてみた場合の墳丘の遺存状況は、良好であると評価できる。

後円部の墳丘基底は、大小の畑と接する部分で若干削られている箇所もあるが、いずれも人力による開墾であるため、基底線を図の太線のように推定復元してほぼ間違いないものと思われる。基底線の平面形は、すでに指摘したとおり、墳丘主軸線と直交する方向に長軸を置く、楕円形を呈している。基底の高さは、両くびれ部付近で-17m等高線、反対側の後円部後方で-26m等高線付近にそれぞれ設定されており、高低差約9mを測る、比較的急な斜面上に割り付けられている。墳丘の斜面には、段築平坦面が3か所に設けられていて、墳丘基底線の楕円形プランや高低差を解消するための努力が払われている。つまり、本古墳の後円部は4段に築成されている。

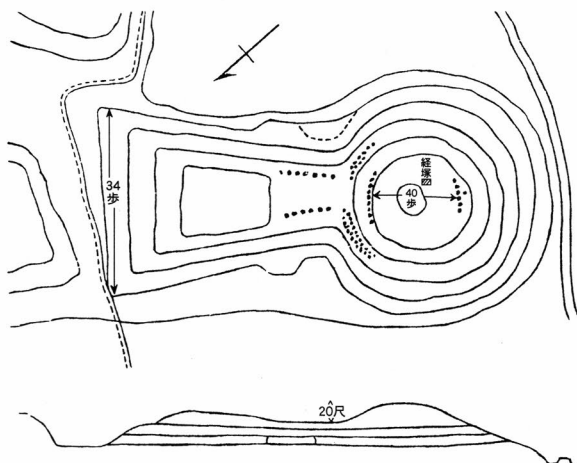
第1段目の段築平坦面は、くびれ部付近で-14m等高線付近、後円部後方では-16~-17m等高線付近の位置をめぐる幅約3mを測る平坦面と考えられる。基底部で計測された約9mの高低差は、この第1段目のテラスでは高低差約2~3mを測る程度となっており、ほとんど目立たなくなっている。ところが、この段築平坦面は前方部を完周せず前方部側面の中央部付近で終息する。

第2段目の段築平坦面は、-12~-13m等高線付近をめぐる幅2.5m前後の平坦面と考えられる。この第2段目の段築平坦面も、前方部側へはまったく続かず、くびれ部付近で終息する。

第3段目の段築平坦面は、-5m等高線付近をめぐる幅1.2~1.5mの平坦面と考えられる。ほぼ正円形にめぐるが、前方部と接続する北東部のみ現状では確認できない。本来の形状が、後円部頂と前方部頂とを結ぶスロープ状をなしていたことによるものか、見学路の設



第6図 神明山古墳の傾斜変換線略測図



第7図 神明山古墳後円部で検出された経塚の位置
(注3文献より転載)

定等の後世の改変によるものかは、現状からは判断できない。

墳頂部は、詳細に観察すると平坦面ではなく、中央部が外周部より1m余り高くなっている。この高まりについては、当初、後世に営まれた経塚の墳丘の残存部の可能性を考えていたが、「(前略)経塚関係遺品ハ後円ノ南隅ニ近キ部分ニ設ケタル石室ヨリ発見セルモノ(後略)」と報告されており、古墳に伴う可能性も考えられる。古墳に伴

うものとするれば、後円部頂部の中央に営まれた円形の土壇である可能性を指摘しておきたい。

後円部の墳丘は、何箇所かの断面での所見によれば、基底部から盛土によって築成されているものと思われる。とくに後円部右後方の最下段の墳丘斜面は、急な斜面が続くにもかかわらず、本来の形状を比較的よくとどめている。この部分の墳丘には、表面の葺石とは別に、封土の中に人頭大の自然石が高密度で含まれており、墳丘の崩落を防ぐための土石混合法とでも呼ぶべき、独特な工法が採用されている可能性が考えられる。

前方部の墳丘基底のうち、くびれ部から側面にかけての付近については、比較的良好な遺存状態を示している。左隅部付近は、見学路と里道によって一部削られている可能性はあるが、一部は地下に遺存しているものと推察される。一方、右隅部については、里道と畑の開墾によって既に削平されてしまっているものと思われる。前方部の前面については、左側約半分は溝状に掘り込まれた里道によって失われているものの、陸橋部の右側では良好な遺存状態を保っているものと判断できる。

これらの前方部の墳丘基底の残存部を根拠に欠失部を補足して全体を推定復元してみたのが第6図である。くびれ部と隅部とを結ぶ側縁線が、直線ではなくわずかに外反するカーブを描く、いわゆるバチ形平面を呈していることが明らかとなった。

段築平坦面は、前方部前面の斜面では-12~-14m等高線付近と-8m等高線付近の2か所で認められることから、三段築成されていることがわかる。ただし、前方部前面で観察された段築平坦面は、いずれも稜線の付近で終息する。したがって、前方部の側面の中央部付近では、段築平坦面が確認できない、一段築成となっている部分も現存する。

すなわち、神明山古墳の墳丘の段築技法の特徴として、後円部で確認された段築平坦面

と、前方部の前面で確認された段築平坦面とはまったく接続しない、不連続段築面となっている点を指摘することができる。

以上の作業を経て推定復元される墳丘の規模は、全長約186m(最大値、主軸線上では約184m)・後円部長径約127m・後円部短径(墳丘主軸)約112m・前方部幅



第8図 北からみた神明山古墳前方部左隅部の現況

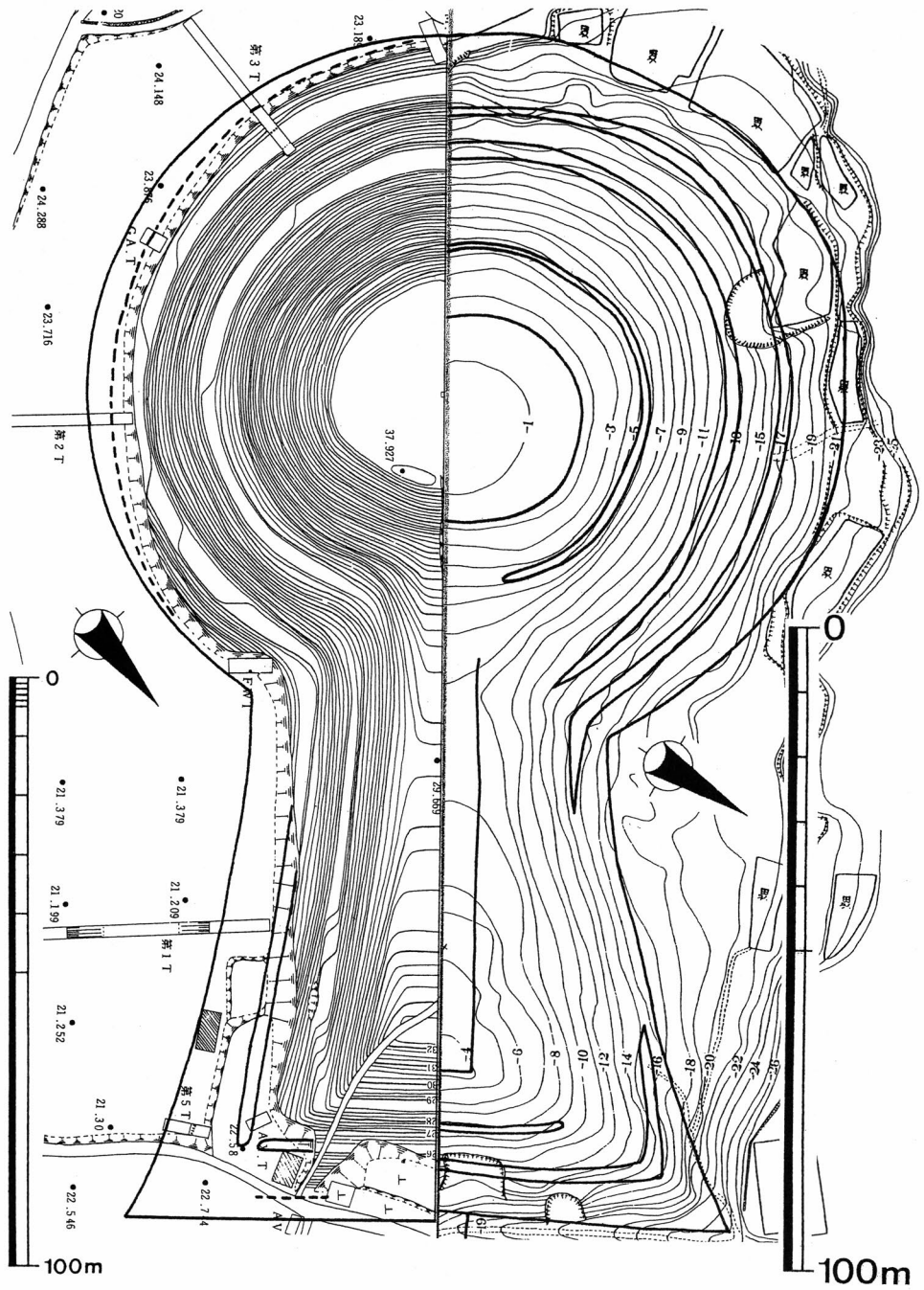
約86m・後円部高約27m・前方部高約21mとなる。この数値のうち、前方部幅については、両隅部の残りがよくないため、今後の調査研究の進展によって、若干の変動・修正が生じる可能性は高いと思われるが、全長と後円部径については、計測点およびその周辺部の墳丘基底の残り具合からみて、ほぼ動かないものと思われる。

4. 神明山古墳と網野銚子山古墳

前項で検討した、神明山古墳に見られるいくつかの特徴のうち、前方部の側縁の基底線がわずかながら外反するカーブを描く、いわゆるバチ形平面を呈している点については、網野銚子山古墳と共通する特徴といえる。^(注4)また、不連続段築面を伴うという点においても、神明山古墳と網野銚子山古墳は共通する特徴を備えているといえる。この不連続段築面を伴う前方後円墳の築造技法は、前方後円形の墳丘を三段に重ねる工法が成立するより以前に採用されていた工法と見られるもので、箸墓古墳・西殿塚古墳・行燈山古墳・渋谷向山古墳などの大王墓においても採用されている工法である。

私は以前、網野銚子山古墳の墳丘を復元的に研究し、その墳形モデルの候補として西殿塚古墳を挙げたことがある。^(注5)この仮説の当否については、当面は保留するとしても、神明山古墳と網野銚子山古墳の両古墳に認められる、バチ形傾向の前方部と不連続段築という二つの墳丘築造技法上の特徴は、大和盆地東南部地域から導入された可能性がきわめて高いものと思われる。

第9図は、神明山古墳と網野銚子山古墳の両者の墳丘を比較検討するため、測量図の縮尺を調整して後円部径を全く同じ寸法にそろえたものを作成した上で、中軸線で半截した図を重ね合わせたものである。一見して明らかなように、神明山古墳の前方部は、網野銚



第9図 神明山古墳(右)と網野銚子山古墳(左)

子山古墳の前方部と比較して、全長・前端部幅・くびれ部幅の各部の寸法が、わずかに小さく造られていることがわかる。このわずかな差は、立地条件の違いに起因するものと解釈すれば、両者の墳丘の相似度は極めて高いと判断される。

極論すれば、神明山古墳は網野銚子山古墳をモデルプランとし、網野銚子山古墳と同形同大の墳丘を築造する計画であったと推察される。ところが施工段階に至って、後円部については、盛土工法により、厳密には楕円丘だが、ほぼ設計図どおりの墳丘が築造されたものの、前方部については、地山を掘り下げる工事を若干省略したため、結果として、網野銚子山古墳の前方部より一回り小さい前方部になったと推察される。くびれ部の設定の仕方についても、後円部の墳丘規定の標高が後円部後方と比較して前方部側の方が約9mも高く設定されているため、当然の帰結としてくびれ部の幅は設計図より小さくおさまることになったと思われる。

出土遺物について、両古墳に共通して認められる特徴として、壺形埴輪を伴うことが知られている。形式的には網野銚子山古墳出土のものが、I型式古段階に属しているのに対し、神明山古墳出土品はI型式新段階^(注6)に属していることが知られている。この埴輪の特徴から、網野銚子山古墳から神明山古墳へと続く、古墳編年を想定することができる。

以上の検討により、神明山古墳と網野銚子山古墳の二古墳は、同一のまたは同系列の技術者集団によって網野銚子山古墳、神明山古墳の順に相次いで築造された、極めて親近性の高い、兄弟古墳であることが明らかとなった。さらに、両古墳の築造にかかわった技術者集団は、大和盆地東南部から当地に導入された可能性があることが今回の検討で明らかとなった。

5. おわりに

私は最近、福田川河口部と竹野川下流部に営まれた古墳を、同一地域の古墳と捉え、網野銚子山古墳を嚆矢とし、神明山古墳、黒部銚子山古墳、産土山古墳へと継承されていった首長権の存在を構想している。本稿はその構想の一部をなすもので、神明山古墳の調査結果をもとに、網野銚子山古墳と神明山古墳の2基の巨大前方後円墳が、同じ地域内にあって縦系列をなすものであることを立証するとともに、丹後地域に分布する主要古墳の私なりの地域区分・編年案を提示することを目的として作業に取りかかったが、後半部分については、紙数と時間との関係上、果たせなかった。この点については、機会を改めたいと思う。

(おくむら・せいいちろう＝当センター調査第2課課長補佐兼調査第4係長)

- 注1 奥村清一郎「丹後半島の大型前方後円墳—その築造原理を探る—」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 注2 小沢和義「神明山古墳実測調査報告」(『同志社考古』7 同志社大学考古学研究会) 1969
- 注3 梅原末治「神明山古墳」(『京都府史蹟勝地調査会報告』第1冊 京都府) 1919
- 注4 奥村清一郎「網野銚子山古墳を考える」(『京都考古』第78号 京都考古刊行会) 1995
- 注5 注4文献8～10頁
- 注6 奥村清一郎「丹後蛭子山古墳の測量図を読む」(『京都府埋蔵文化財情報』第60号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996